

禅の友

Zen no Tomo

5

May 2020

特集 端午





ご本山だより 大本山永平寺

【こうか乞暇の道】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二



臯月を迎えた山々はみずみずしい若葉をたたえています。

五月の大型連休のころには永平寺にも多くの参拝者が訪れます。さわやかな風の中、山門の参拝者の間を縫って雲水が乞暇していく姿が見られます。修行に来た時と同様の装束に身を包み、草鞋を履き、網代笠を被る。上山の時に見せていた緊張の表情ではなく、皆一様に朗らかな表情。そしてその姿はひたすらに坐禅に打ち込んできた凜として柔らかな立ち姿です。

修行に区切りをつけることを、乞暇といえます。ここでの修行生活にお暇をいただき山を下りてゆきます。そしてまた、新たな学びを求める旅に出発してゆきます。

「下山の道は上山の道」と言われております。永平寺に正しい教えを求め、一心に修行に打ち込んだからこそ得られた特別なモノがここにはあり

ます。しかし、修行をしたからといって、生きている限りは苦しみや悲しみなど逃れることのできない困難に直面することもあります。辛くて逃げ出したくなるような時、ふと頭をよぎる修行仲間の顔に「よし、もう一度頑張ろう」と勇気を奮い立たせ、また一歩を踏み出すのです。

永平寺の山門には鍵もなければ扉もありません。真に仏法を求める覚悟あるものに対しては常に開かれています。ただし、そこにあるものはただただ、仏さまの道を歩み続ける一歩があるだけです。

荘厳な山門と新緑の五代杉に見送られ、雲水の足取りは軽やかです。彼らの行く先はどこであつても修行の場となります。暇をもらい山を下りたとしても、その道は永平寺から続いている道を歩み続けているのですから。



ご本山だより 大本山總持寺 【夏安居制中】

大本山總持寺 ☎ 〇四五・五八一・六〇二一

現在、總持寺本山僧堂では、夏安居制中に入っております。

僧堂では「行」を重んじます。

ご開山瑩山禪師さまの御教えを、身体を使い心を働かせて精進していくことが、歴代仏祖の標準に適うことであります。精進は、「精」が雑じらない、「進」が退かないという強い信念です。すなわち、余念をまじえずコツコツと丁寧に行じていくことです。

昨今、どの僧堂に於いても修行僧の減少が懸念されておりますが、本年は總持寺本山僧堂へ五十七名の新しい修行僧が入門しました。彼らの精進を願ってやみません。

五月半ばの十三日から十七日にかけて「五則」という行持が行われます。この五則の儀式は、曹洞宗の歴史と伝

統を受け継ぐもので、しっかりと学び間違えず行じることが求められます。宗門の伝統と法式を正しく学ぶことは、修行の重要な眼目といえます。

十六日には自省の儀式であります「大布薩式」が、また翌十七日には首座和尚が大勢の修行僧と問答を交わす「法戦式」が行われます。

法戦式は、文字どおり緊張漲る真剣勝負です。首座和尚は自らの力量を全て出し切り、二十五名の問者と問答を繰り広げます。

五則が無事終了いたしますと、一〇〇日間の集中修行期間も残すところ半分となり、修行僧たちの表情が一段と引き締まっています。

選・坊城俊樹

在りし人背中ばかりや春愁

静岡県 東学克江

評「在りし」とは、かつて生きていた人という意味だろう。春の愁いが深くなるころ、人は過去の面影を追うものである。その人たちは皆背中を見せて、こちらを向くことはない。その寂しさがにじみ出ている作品。

道化師の娘盛りやチューリップ

長野県 森山昌子

評 道化師とは大道芸人をさすものと思う。その人はなんと若い娘さんなのである。彼女の可愛い道化師のコスチュームや言葉遣いなどが浮かんでくる。そのそばには、彼女のようなチューリップたちが揺れている。

◆ 浅き春日の丸あがる駐在所

兵庫県 美濃 敏子

◆ 心とけず君の便りの来ぬ春か

滋賀県 三田 和子

◆ 三極の先三極の花咲きぬ

神奈川県 佐野 勇

◆ オカツパ頭とおしくら饅頭焼け野原

大阪府 岡 恭介

◆ 亀鳴くや昭和の匂ふ映画館

埼玉県 小林 茂之

◆ 貼り足して切手一枚寒夕焼

東京都 友野 瞳

◆ 雪女待つやに蔵の古箏筥

秋田県 伊藤 剛司

◆ 茂吉忌や大河を下る炬燵舟

山口県 御江 恭子

◆ 春浅し汚れを知らぬ靴の紐

北海道 中西 千晶

◆ かかりつけの医師は二人や雪女

神奈川県 小橋 幸

選者吟

革靴は軍靴にあらず冬怒濤

俊樹

作句小見 この冬に、福岡県の海沿いにある名護屋城跡に行った。その城はかつて秀吉の朝鮮征伐の基地であり、日本海海戦の港でもあったという。軍靴とはそのことを思った。私の革靴には冬の怒濤の音がただ響くのみである。

選・長澤ちづ

娘の一矢友の一問夜半にまた自問自答の
刻が過ぎゆく

兵庫県 前田 あつ子

評 この歌のような状況は誰しも経験することだが「一矢」「一問」と、娘と友とを区別している点に機知がある。なるほど娘のひと言は遠慮がなく厳しく胸に刺さるし、友は婉曲すぎて何が本当は言いたかったのかと思ひ倦めるのである。

日本よりハワイに送るEメール今日の発
信昨日に届く

千葉県 富野 光太郎

評 時差の関係でそのとおりの一首なのだが、改めて詠われてみると不思議な感動がある。恐らく結句の昨日という過去が未来に転換された点に詩を感じるからだろう。

◆ 四方の山雪消え出稼ぎ団帰る農繁期となり村活気づく

秋田県 小田篤恭

◆ 朝早くどんどの煙が棚引きて潮引く如く正月去れり

鳥取県 山本浩一

◆ 再読の林芙美子の『浮雲』に眠れぬ夜を浮き沈みする

秋田県 小松紀子

◆ 映写機の小雨降るよな音聞きつつ螢の夜に見た「青い山脈」

三重県 西村廣視

◆ 人の世の楽しみ倍に生かませと卒寿の人に吟醸酒贈る

山口県 濱田道子

◆ 朝焼けの稜線さやかに見えたればやはり雨かと傘たずさぬ

京都府 内田孝子

◆ 朝早く初雪のなか美容院へ座れば直ぐに湯たんぽ渡され

京都府 小林靖子

◆ 雪無くば霜強き日白葉の縮むホウレン草をいたわりて摘む

岩手県 穴戸さとる

◆ 振り向けば二年と迫り白寿くる働き詰めで齢に驚く

岩手県 関合新一

◆ 冬の草刈りつつ出会ふ露の藁両手に余る春を戴く

静岡県 杉原民子

選者誌

虚空射る男の視線とらえたる今日のわたしの心すさみて

ちづ

作歌小見

この頃の天気予報は実に親切で、洗濯を干す干さないから、その日の服まで決めてくれ濃やかです。内田さんの歌は地域ならではの気象観察から雨が降る降らないを判断し、それを詩に昇華して詠われていて惹かれました。